「タエコ」

―２稿―

2024/12/18

雨森　れに

〈人物表〉

寺沢　タエコ　（１２）　フィリピンのハーフ。
寺沢　マリエル　（３３）　フィリピン人。スナックのママ。

〈ログライン〉

母親から辛く当たられているタエコが、子犬を拾い、世話をすることで「理想の家族」を投影して心を慰めるが、母親の残した煙草の誤飲により子犬を亡くし、喪失感を味わう。

〈ねらい〉

・テーマ触媒：本当に書きたいもの。
・弔いのシーンを書く。

1. アパート・外（夜）

雪がちらついている。築古のアパート。道路に面したゴミ捨て場にはいくつかゴミが捨てられている。

2階の部屋の扉が開き、寺沢タエコ（12）が出てくる。制服に男物のジャンパー、赤いマフラーをつけている。手にはゴミ袋。

タエコがゴミ捨て場で固まる。

捨てられた段ボールから子犬の声。

タエコ、手を伸ばす。

2. 寺沢家・室内（夜）

1Kの部屋は散らかっている。布団は敷きっぱなしで、床には督促状や封書が未開封のまま放置されている。

タエコは子犬をジャンパーの懐に入れている。

ジャンパー越しに撫でながら、

タエコ「さむかったよね」

布団に子犬を乗せる。

子犬につけていたマフラーをかけながら、

タエコ「これであっかいし、私がいないときも、私の匂いがあって寂しくないでしょ」

タエコも布団に寝転がり、かけ布団が子犬にもかかるようにする。

子犬を見ながら、

タエコ「わたしも、寂しくない」

3. 商店街・スナック通り（朝）

商店街の最後尾あたり、スナックが多く並ぶ。通勤する人が駅に向かって歩いている。

スナック「ベンジャミン」の扉前に回収を待つおしぼりの箱。

タエコが箱に座っている。人の視線に耐えられず、下を向く。

「ベンジャミン」の扉が開き、寺沢マリエル（33）

が出てくる。

タエコ「ママ、あのね。昨日ゴミ捨て場に」

マリエル「（遮って）マガンダン・ウマガ。おはようも言えないノ。さすがタエコ。私の排泄物」

タエコ「なんでいつもそういうこと言うの！」

マリエル「挨拶もできない娘ダカラ」

タエコ「（怒りを耐えて）マガンダン・ウマガ……」

マリエル「（鼻を鳴らす）知ってるか？　フィリピンなら家族に『ご飯食べた？』って聞くのが挨拶よ。でもタエコは私の排泄物だから、家族じゃなイ」

タエコ「そんな挨拶教わってないよ」

マリエル「覚える必要ナイ。覚えておくのは、タエコっていうのはフィリピンで『私の排泄物』って意味ってことダケ」

マリエル、歩き出す。

タエコはその後に続く。

マリエルがアイコスに煙草を差し込む。

タエコ「ママ、話聞いてよ」

マリエルは無視して吸い始める。

タエコ「昨日の夜、ゴミ捨てに行ったら」

マリエル「うるさいヨ！　私は生活費稼いでるンでしょうガ！どうでもいいこと聞かせるナ！」

マリエル、煙草を抜いてタエコの顔に投げつける。

更に千円札2枚を投げつけて、

マリエル「しばらく帰らなイ。店にも来るナヨ」

と去っていく。

お金を拾うタエコ。

4.　スーパー・店内（朝）

タエコがドッグフードを見る。一番安い、９８０円の1週間分サイズを選ぶ。犬用おやつも手に取るが、悩んで戻す。

菓子パンコーナーに移動し、１５０円の小さいパンが数個入っている商品を1つだけ選ぶ。

5.　寺沢家・室内（朝）

タエコ、皿にドックフードを入れる。
子犬に向かって微笑み、
タエコ「ごはん、食べた？　ふふ、私が持ってきてるのにおかしいよね」
子犬にドッグフードを与える。
自分もパンをひとつ取り出して齧る。
一生懸命食べようとする子犬を見て、嬉しそうな表情。
タエコ「名前、なんにしようかな……」
タエコは床にホコリを被ったタガログ語辞典を見つける。
辞典を開き、ページを捲る。
タエコ「たからものは……カヤマナン？」
子犬のほうを向いて、
タエコ「カヤマナン！」
子犬がタエコを見る。
×　×　×
玄関が開く音。
マリエルが帰ってくる。
マリエル「忘れものシタ」
タエコ「帰ってこないって……」
マリエル、子犬に気付く。
マリエル「おい、なんで犬がいるダヨ！」
タエコ「（子犬を抱きよせて）だって……話そうとしたじゃん」
マリエル「聞いてない！　ここは犬禁止だよ、わかってるか！」
タエコ「でもっ、ひとりじゃ死んじゃうよ！」
マリエル「ハ？　お前、何様？　捨ててこいヨ」
タエコ「こんなに小さいんだよ。また雪が降るかもしれないし、ほっとくなんて無理だよ！」
子犬を強く抱きしめるタエコ。
マリエル、見下すように息を吐く。
マリエル「じゃあ、お前が出てけ」
タエコ、絞り出すような声で、

タエコ「え……」

マリエル「ここは私の家。お前が犬連れて出てけ」

マリエル、探し物をしはじめる。タエコに興味をなくしたように。

ごちゃついたテーブルの上を引っ掻き回す。アイコスの吸殻やゴミが床に散らばる。

マリエルは香水瓶を見つけ、鞄へ入れる。

タエコのほうを見て、

マリエル「私はお前がいなくてもイイ。ただの排泄物ダカラ」

吐き捨てるように言い、出ていく。

タエコ、震える手で子犬を撫でる。

タエコ「（泣きそうな声で）大丈夫だよ。私にはカヤマナンがいないとだから――お前はあったかいね」

タエコが鼻をすする。

家電が鳴る。

留守電まで無視していると、マリエルの声が吹き込まれる。

マリエルの声「タエコ！　充電器！　駅前にこい！」

6.　駅前（昼）

踏切を待つタエコ。息を切らしている。

踏切が開く。

マリエルが反対側で待っている。

マリエル「遅いヨ」

充電器をひったくるようにして取られる。

マリエルは傍にいた男の元へ。

男にはタエコが見たことないような優しい笑みを浮かべている。

タエコの手に力が入る。

踵を返し、家へと走り出す。

7.　寺沢家・室内（昼）

タエコ「ただいま……カヤマナン！？」

子犬が倒れている。口元にはアイコスの吸殻。

タエコ「だめ、だめ！」

子犬の口に指を突っ込み、吸殻を掻きだす。背中を叩き吐き出させようとするが、反応がない。

胸のあたりに耳を当てる。

タエコ「うそ」

口に息を吹きいれるが、子犬はだらんとしている。

タエコは泣きそうになりながら、心臓マッサージをする。

× × ×

夕暮れ時。アパートに響くタエコの泣き声。

8. 河川敷（夜）

広めの川が流れる河川敷。

タエコが、すすけた一斗缶を橋の下に運ぶ。

一斗缶の中に小枝や新聞紙を詰めていく。

マフラーで包んだ子犬をその上へ。

マッチで火をつけ、燃え上がる様子をじっと見つめる。

暗闇に燃える炎が、火星のようにちらちらと燃える。

黒い煙が夜空に溶けていく。

× × ×

一斗缶から骨を取り出すタエコ。

ひとつひとつ、慈しむように。

タエコ「やっぱり、カヤマナンはあったかいね」

タオルに包んだ骨を抱きしめる。

タエコ「でも、寂しいよ」

雪がちらつき始める。

おわり